

F 7 小学校家庭科低学年履習についての提案 — 他教科との関連において —
大阪教育大 新福祐子 加地芳子
大谷女子短大 ○古川 愛 大阪教育大院生 大村育代 葉映蘭

目的 家庭科は教科の成立過程やその本質からみたとき、教科として重要な意義をもつにもかかわらず、その存在はややもすれば不確定で常に教科軽視や切り捨て論が問題となってきた。新学習指導要領での授業時間削減、学習内容の縮小などをみたとき、家庭科全般についての見直しが必要であろうと思われる。中でも小学校家庭科の低学年履習については、以前からその可能性が論じられているものの、十分な研究はなされていない。そこで小学校の各教科の到達目標（評価目標）を検討し、他教科との関連から家庭科の低学年履習が可能であることを提示したい。

方法 学習指導要領の改訂に伴って、指導要録の様式や記入方法等の改善がなされ、小学校では昭和55年度より実施されている。今回の改訂ではその趣旨から指導のための資料として一層役立てるための性格が重視され、評価についての創意工夫や指導法の改善充実が期待されている。新指導要録に基づく「具体的評価内容」の中から他教科で指導されている学習内容（評価内容）のうち、家庭科として指導できるものを、知識理解、技術技能、関心態度の各観点別に選び出した。さらに現行5、6年の内容を他教科の内容と関連づけ、1～6年に再編成を試みた。また、各学年毎の各領域内の調整も行った。

結果 これからの小学校家庭科のあり方として、他教科の評価観点との関連から、現行の指導要領のわく内で、内容的にも発達段階的にも生活的立場からの低学年履習ができるカリキュラムを作成し得た。